

令和元年6月17日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02696

研究課題名(和文) CLIL活性化のためのtranslanguagingの理論構築および指導法開発

研究課題名(英文) Constructing translanguaging theory and pedagogy for active CLIL practice

研究代表者

池田 真 (Ikeda, Makoto)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：10317498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、CLIL(内容言語統合型学習)におけるtranslanguaging(原理に基づく母語活用)の概念構築と定義付け、指導原理と技法の開発、教室での実践と効用の検証を行った。研究方法としては、文献と学会参加による知見・情報収集、欧州での学校訪問による指導事例収集、研究協力校での授業観察と教員インタビューによるデータ収集を行い、教室談話分析を含む質的分析を行った。その結果、CLILにおけるtranslanguagingの明確な定義と機能、理論に基づく指導原理、実践のためのフレームワークと指導例、教室での効果的な活用場面を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は国際性と独創性にある。国際性としては、translanguagingの理論構築に非ヨーロッパ人として貢献した。CLIL授業での母語と英語の使い分けは、英語との距離が遠く、言語環境も異なる非印欧語国が切実であり、その研究と実践に関しては日本人学習者を対象とする本取組が参考となろう。独創的な点は、概念構築から教室実践までを扱った包括性と実用性にある。それにより、CLILにおける母語観の一大転機が起こりうる。従来はCLILでの母語使用は外国語で学習が成立しない時の妥協と捉えられてきたが、第一言語に役割を認め、第二言語と共に「言語力」として高めていく積極的見方に転換するからである。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on translanguaging (active, purposeful and informed use of the first language) in CLIL (Content and Language Integrated Learning), clarifying its concept and definition, developing its pedagogical principles and techniques, and examining its classroom practice and effectiveness. The research methods include acquiring knowledge and information by literature review and conference participations, accumulating classroom examples by school visits in Europe, and collecting empirical data by teacher interviews and lesson observations, the last of which are analysed qualitatively using classroom discourse analysis techniques. Based on these research procedures, this study produces, as final outcomes, a precise definition and a list of key functions of pedagogical translanguaging in CLIL, a practical framework and concrete examples for future classroom practice, and possible domains where translanguaging is employed effectively in classroom instructions and interactions.

研究分野：英語教育、CLIL、英語学

キーワード：CLIL translanguaging 英語教育 アクティブラーニング グローバル人材育成 国際情報交換

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) CLIL (Content and Language Integrated Learning) は 21 世紀のヨーロッパで普及している教育法である。これは「CLIL の 4C」と言われる Content (科目内容)、Communication (言語知識と技能)、Cognition (多角的思考)、Community/Culture (共同学習・地球市民意識) を組み合わせた教育方法であり (Doyle, Hood & Marsh 2010)、EU (欧州連合) の複言語主義 (母語 + 2 か国語) を背景に、優れた総合的学習法としてヨーロッパ各国で取り入れられている。

(2) CLIL の研究は、初期段階では言語教育政策、カリキュラム開発、言語面での学習効果といったマクロレベルのものが多かったが、近年は教室でのインタラクション、教科学習における言語の役割、内容学習と言語学習の融合といったミクロレベルのものに焦点が移ってきている (Dalton-Puffer, Nikula & Smit 2010)。中でも機能言語学に基づく CLIL 授業の言語機能分析研究は「言語意識に基づく指導法」という具体的な実践方法にまで結実している (Linares, Morton & Whittaker 2012)。その延長線上にあるのが、本研究のテーマである translanguaging である。これは研究開始当初はまだ新しい用語で、一致した定義がなかったが、概ね「内容学習における母語と第 2 言語の積極的かつ意図的活用」といった概念である (García & Weigh 2014)。

(3) 上記のヨーロッパでの実践と研究の動向を踏まえ、申請者は CLIL の紹介と普及に努めてきた。というのは、「CLIL の 4C」は我が国が必要としているグローバル人材育成のための要素をすべて含んでいる国際水準の教育方法だからである (池田 2014)。そのための方法として、本来は理科や社会などの科目教育である CLIL を、英語教育の一環としてトピックを用いて行う弱形 CLIL として提示し、その方法論 (シラバス設計、授業計画、教材作成、指導法、評価法など) を実践書、教科書、論文、雑誌記事、招待講演、教員研修を通して広めてきた。現在では、小学校外国語活動から大学での専門授業まで、多くの CLIL の実践が見られる。

(4) 以上の実践と研究を進める過程で直面したのが、CLIL を行う際の日本語と英語の使い分けであった。第二言語習得を最適化するためには全てのインプット、アウトプット、インタラクションを英語で行うのが理想的であるが、地球温暖化などのテーマ学習を進める上では日本語を介在した方が効果的な場面がある。そこで着目したのが translanguaging である。これは、研究開始当初には CLIL 実践における最新の考え方であったが、スペインやスエーデンではその方法や効果に関する初期研究が発表されていた (Lasagabaster 2013, Yoxsimer Paulsrut 2014)。本研究の目的は、それを発展させて、日本の CLIL 実践の場で母語と英語の活用による言語教育および内容教育の具体的指導法を産み出すことにあった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は translanguaging の全体像 (概念、定義、原理、指導法、効用) を明らかにすることであった。具体的には、以下の 3 点に取り組んだ。

(1) translanguaging の概念作りと定義付け

(2) translanguaging 実践のための指導原理と技法の確立、およびそれを分かりやすく伝えるためのモデル化

(3) translanguaging を CLIL 授業で実践し、その実用性と効用を検証

## 3. 研究の方法

本研究は(1) 概念構築、(2) 実践調査、(3) 指導法開発、(4) 教育実践の 4 段階に分けて行った。

(1) 概念構築では、徹底的な文献研究を行うと同時に、translanguaging 研究を牽引するスエーデンとウエールズの国際学会に参加し、概念や定義を策定する議論に加わり、現地研究者と情報交換を行った。

- (2) 実践調査では、スウェーデンとオーストリアで授業観察を行うと共に、教材と指導法の事例を収集した。その際には、教員への聞き取りも行い、translanguaging に関する意識を探った。
- (3) 指導法開発では、(1)の概念構築と(2)の実践調査に基づき translanguaging の理論化とモデル作りを行い、我が国の教育現場で応用できる具体的な指導原理としてまとめた。
- (4) 教育実践では、(3)の理論化と指導法開発に基づく教員研修を施した上で、小中高 3 校の研究協力校で通年にわたる translanguaging を取り入れた CLIL 授業を実践し、授業観察と教員への聞き取りを行い、その効果的活用を検証した。その際には、フィールドノートの記録に基づき授業の録音データを談話分析し、特にどのような場面でいかなる translanguaging の指導が効果的な学習をもたらすかを、「重要な出来事 (critical incidents)」(Cohen, Manion & Morrison 2011) に注目して検証した。

#### 4. 研究成果

3の研究活動の結果、CLILにおけるtranslanguagingに関して、下記の知見を得た。

##### (1) translanguaging の定義

文献に基づく考察の結果、以下を CLIL における translanguaging として定義した。

「CLIL 教室における translanguaging とは、事前に計画された学習活動や授業中に交わされるやり取りにおいて、科目固有の知識とアカデミックな言語能力を最大限に高めるべく、目的を持って活発に自言語と目標言語を用いることである。」

##### (2) translanguaging の機能

文献で論じられている効用を大まかに整理すると、translanguaging の機能は、教育的機能(指導の効率性)、意思疎通機能(コミュニケーションの円滑さ)、メタ言語機能(言語面の理解)、心情的機能(心的安定感)、認知的機能(思考の活発化)の5つに分類できる。

教育的機能	時間節約、足場かけ、理解促進、母語で獲得したスキーマ(既存知識)へのアクセス、学習ストラテジーとしての活用、教師と生徒の言語不足補助、二言語リテラシーの発達、現実世界のスキル、テストでの使用など
意思疎通機能	スムーズなやり取り、授業運営、しつけなど
メタ言語機能	言語的説明、母語と外国語の対照、気づきの促進、言語形式への注目など
心情的機能	ラポール(教師と生徒の心的一体感)、学習者のアイデンティティー、積極的参加など
認知的機能	深い思考、振り返り、学習の定着など

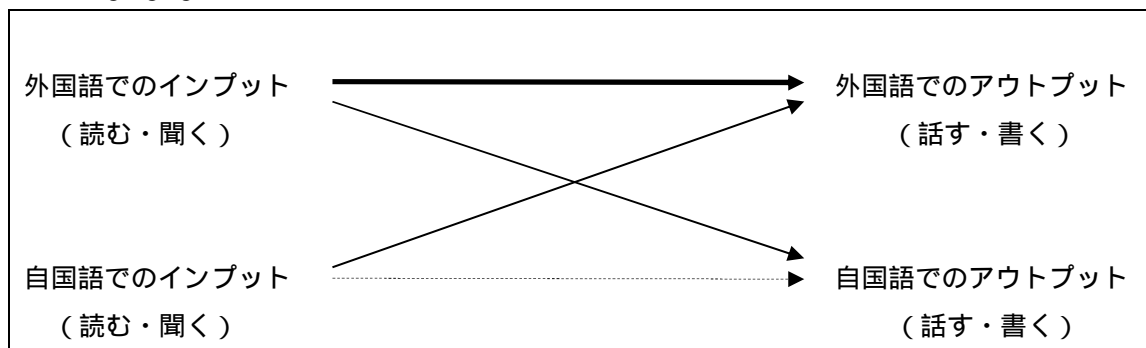
##### (3) translanguaging の指導原理

文献に出てくるキーワードを拾うと、CLIL における母語使用の原理は 8 項目に要約される。

目的・原理・理論に基づく指導を行う (purposeful/principled/informed strategy)
事前に学習活動を計画する (planned activities)
本物の言葉の使い方をする (authentic language use)
活発に言葉を使う (active language use)
意味の伝達を重視する (meaning-oriented)
内容学習の手段として活用する (a means to content learning)
二言語スキルそのものが目標でもある (an end in itself)
二言語でのリテラシーを発達させる (biliteracy development)

#### (4) translanguaging のフレームワーク

「柔軟複合モデル」(Flexible Multiple Model, García 2009: 342) を参考に、CLIL 教室での translanguaging 活用法は次のように視覚化できる。



太線 が表しているのは、本来の CLIL 授業における新知識の受容と産出の経路である。つまり、目標言語で読んだり聞いたりすることで新しい科目内容が与えられ、その理解を深めたり活用するタスクも目標言語で行うというものである。その逆が点線 により示されている自言自语のみによる知識の受容と産出であるが、これは通常の第一言語による学習であって CLIL ではない。translanguaging が担うのは実線 による学習プロセスである。そこにおいては、外国語で学習内容のインプット(文章、音声、映像など)が与えられ、本国語でその新知識に基づく何らかのアウトプット(議論、発表、文章など)を行ったり(実線 )、それとは逆に本国語で得た知識を活用して外国語で何かを産み出す(実線 )。

#### (5) translanguaging の指導例

translanguaging を用いた具体的な指導例としては、以下のような学習活動が考えられる (Deller & Rinvolucry 2002, Duff 1989, García & Wei 2014, Kerr 2014 に基づく)。

英語→日本語

外国語技能	外国語での受容活動	本国語での産出活動
語彙	英語で新知識の鍵となる用語を与える	日本語の用語に置き換える
読む	英語で新知識に関する文章を読む	日本語でメモを取る、要約する
聞く	英語で新知識に関する映像を見る	日本語でメモを取る、要約する
読む・聞く	英語で文献やネットから情報を集める	日本語でディスカッションする
読む・聞く	英語で文献やネットから情報を集める	日本語で小論を書く
読む・聞く	英語で文献やネットから情報を集める	日本語で口頭発表をする

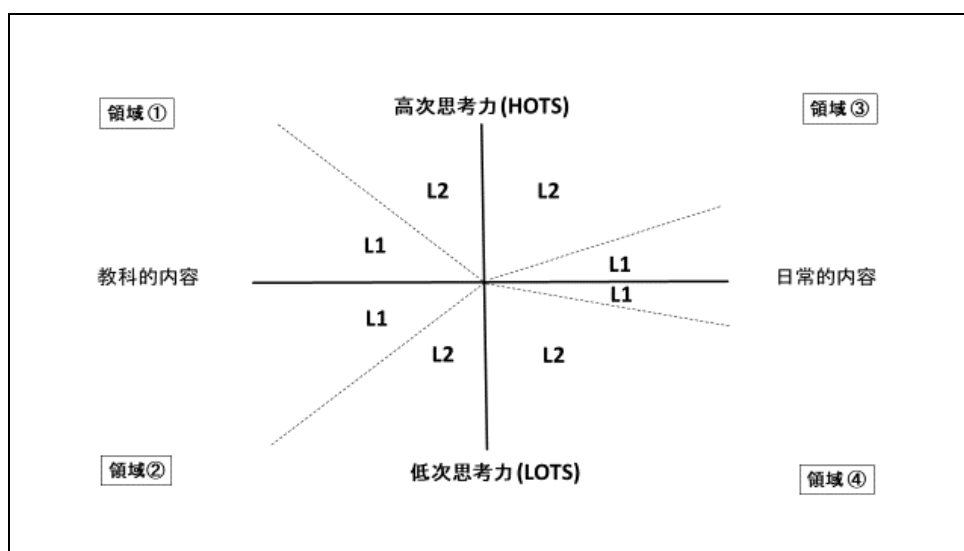
日本語→英語

外国語技能	本国語での受容活動	外国語での産出活動
語彙	日本語で鍵となる用語を与える	英語の用語に置き換える
書く	日本語で文献やネットから情報を集める	英語でエッセイを書く
書く	日本語でアウトラインを作る	英語でエッセイを書く
話す	日本語で新知識に関する文章を読む	英語でディスカッションする
話す	日本語で文献やネットから情報を集める	英語で口頭発表をする
話す	日本語でアウトラインを作る	英語で口頭発表をする
話す	日本語でディスカッションする	英語で意見をまとめ、発表する

#### (6) translanguaging の活用領域

CLIL 授業ならではの translanguaging の活用は、教科内容に直接関係し、高次思考力(分析、評価、創造)を伴う活動、教科内容に直接関係し、低次思考力(暗記、理解、適用)を用い

て行う活動、 教科内容と日常生活を関連させ、高次思考力を伴う活動、 教科内容と日常生活を関連させ、低次思考力を用いて行う活動、の4領域に見られる（図中のL1は母語、L2は第2言語を意味する）。



このうち、教科内容の理解と定着に直結する と では原理に基づき積極的に、獲得した知識を高次思考力を使って現実世界に応用する においては必要に応じて translanguaging を活用することで学習全体の最大化を目指し、日常生活との関連付けを低次思考力のみで行う においては言語習得を優先するため translanguaging を控えめにすると効果的である。

#### <引用文献>

- Coyle, D., Hood, P. & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cohen, L., Manion, L. & Morrison, K. (2011). *Research Methods in Education* (7th ed.). Oxford: Routledge.
- Dalton-Puffer, C., Nikura, T. & Smit, U. (Eds.) (2010). *Language use and Language Learning in CLIL Classrooms*. Amsterdam: John Benjamins.
- Deller, S. & Rinvulcri, M. (2002). *Using the Mother Tongue: Making the Most of the Learner's Language*. Peaslake, Surrey: Delta Publishing.
- Duff, A. (1989). *Translation*. Oxford: Oxford University Press.
- García, O. (2009). *Bilingual Education in the 21st Century: A Global Perspective*. Oxford: Blackwell.
- García, O. & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kerr, P. (2014). *Translation and Own-language Activities*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lagabaster, D. (2013). 'The Use of the L1 in CLIL Classes: The Teachers' Perspective', *Latin American Journal of Content and Language Integrated Learning*, 6/2: 1-21.
- Llinares, A., Morton, T. & Whittaker, R. (2012). *The Roles of Language in CLIL*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yoxsimer Paulsrut, B. (2014). *English-Medium Instruction in Sweden: Perspectives and Practices in Two Upper Secondary Schools*. Stockholm: Stockholm University.
- 池田真 (2014). 「グローバル・リーダーの素養を伸ばす CLIL 型授業」, 『英語展望』, 第 122 号, 22-28 頁.

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

池田真、「MYPにおける形成的フィードバックの原理と実践：評価コメントの分析と活用」、『国際バカロレア教育研究』、査読有、第2巻、2019年、1-10頁

池田真、「CLIL（内容言語統合型学習）における translanguaging（二言語活用）のモデル構築」、『英文学と英語学』（上智大学英文学科紀要） 査読無、第53号、2017年、1-12頁

池田真、「英語科におけるコンテンツ、コンテキスト、コンピテンシー」、『指導と評価』、査読無、第63巻1月号、2017年、57-59頁

池田真、「21世紀のグローバル英語教育：CLIL（内容言語統合型学習）の理念と方法」、『全英連会誌』、査読無、第53号、2015年、4-11頁

### 〔学会発表〕(計9件)

Makoto Ikeda, 'Visible language pedagogy in content-oriented learning', International Forum on CLIL (Taiwan), 2018 (招待講演)

Makoto Ikeda, 'CLIL for challenges and changes in English language education in Japan', 北東アジア英語教育学会, 2018 (招待講演)

Makoto Ikeda, 'Chances and challenges for CLIL programme implementation in Japan', 第1回日本 CLIL 教育学会, 2018 (招待講演)

池田真、「CLIL で育つ学力：言語知識から汎用能力まで」, 日本 CLIL 教育学会西日本支部第1回大会, 2018 (招待講演)

池田真、「CLIL による『主体的・対話的で深い学び』」, 第32回大学英語教育学会 (JACET) 中部支部大会, 2017 (招待講演)

池田真、「CLIL における『統合』とは? : 『見える指導』による内容と言語の統合」, 日本 CLIL 教育学会, 2017 (招待講演)

Makoto Ikeda, 'The ABCs and XYZs of CLIL (Content and Language Integrated Learning)', The 3rd Cardiff Symposium on Applied Linguistics and Japanese Language Pedagogy (Wales), 2016 (招待講演)

Makoto Ikeda, 'A third revolution in ELT?: CLIL as a methodology for competency-based language education', 2016 JALT CUE Conference, 2016 (招待講演)

Makoto Ikeda, 'Implementing translanguaging in tertiary CLIL in Japan: Its contextual, conceptual, pedagogical and research agendas', Translanguaging Network Meeting (Sweden), 2015 (招待講演)

### 〔図書〕(計4件)

Makoto Ikeda et al., Palgrave Macmillan, *Innovation in language learning and teaching: The case of Japan*, 2019, 295 (23-45)

池田真他, 学文社, 『英語で教科内容や専門を学ぶ：内容重視指導(CBI)、内容言語統合学習(CLIL)と英語による専門科目(EMI)の指導の視点から』, 2017, 110 (5-30)

池田真他, 上智大学出版, 『CLIL 内容言語統合型学習、第3巻授業と教材』, 2016, 182 (1-30)

池田真他, 図書文化社, 『教科の本質からコンピテンシーへ：資質・能力を中心に据えたカリキュラム編成と授業づくり』, 2016, 183 (157-177)